



東日本大震災 薬剤師医療支援活動 (2011. 3. 21~26) に参加して 中川直人

2011年3月11日14時46分に、日本の三陸沖でマグニチュード9.0(暫定値)の巨大地震が発生した。東日本大震災と呼称されるこの地震では、本震および余震による被害のほか、津波、火災、そして、福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質漏れや大規模停電などが発生し、東北地方を中心とした日本全国および世界に甚大な二次的被害をもたらしている。

今から約16年前、私が京都の実家に居た時に阪神淡路大震災が発生した。震源からは遠かったため、命の危険は感じなかったものの、非常に恐ろしい思いをしたのを今でもはっきりと覚えている。その当時はまだ幼く、何か被災地のために力になりたくても何もできなかったため、歯痒い思いをした。今回、私の勤めている保険薬局での業務中、患者さんの自宅にて地震の発生を知った。自宅に帰り、事の重大さに気づき、今度こそは被災地の方の役に立ちたいと思い、全日本民医連の募集している震災ボランティアに登録し、現地に赴くこととなった。

3月21日(月) 京都出発

全日本民医連からの支援要請は3月21日から3月26日までの6日間で、21日に東京入りし、翌22日の朝に東京を出発し、午後3時には宮城県多賀城市に到着した。現地は一部で通電しているが、水道とガスは止まっている状態という情報を得ていたので、6日分の水分と食料を持参した。また、いわゆる宿泊施設ではなく、診療所や薬局で寝泊まりすることになると予想されていたので、寝袋や毛布などもすべて用意し、今までの人生で経験したことのない重量の荷物を持ち、現地入りした。

3月22日(火) 現地到着

午後3時に到着後、坂総合病院およびつばさ薬局多賀城店にて、翌23日からの具体的な医

療支援、配置などについてミーティングを行った。トリアージ態勢は 23 日より解除となり、一般診療の再開および避難所支援が継続されることとなった。

3 月 23 日（水） 避難所支援

坂総合病院が担当する避難所で医療支援を行うこととなった。スタッフは医師、薬剤師、看護師、事務、その他職種で構成されており、人数不足のため、残念ながら薬剤師不在のチームもあった。担当は午前文化センター、午後からは小中学校の支援に入った。文化センターは多賀城市でも最大規模の避難所となっており、1,000 人近くの被災者がそこで避難生活を送っていた。2 時間程度ではあるが、医師の診察を受け、処方指示のあった方は 30 人を越えていた。後発医薬品や銘柄が統一されていないものが多いため、医師も混乱している状態であったため、薬剤選択の相談を受けつつ、調剤と服薬指導を一人で行っていた。処方の内容としては感冒剤、整腸剤、制吐剤や抗生剤が多く、定期処方薬を紛失された方には必要最低限の降圧剤なども調剤した。特徴的であったのは、慣れない避難生活で不眠の症状を訴える方が多く、睡眠導入剤が処方されることも多かったように思われる。また、限られた薬しか持ち出すことができないため、必要な薬を出せないことがあり、医療機関への受診を促さざるを得ない場合があった。

学校の避難所は卒業式間近で、避難者も他の避難所に移動を始め、また、日中の比較的暖かい時間に行ったということもあってか、外出されている方が多かったようで、処方指示のある患者は 3 時間で 20 人程度と、文化センターに比べ少なかった。一方、長い避難生活で疲れが出ているのか、毛布にくるまり、寝ている方が多かったように思う。震災後二週間近くたち、通院できる方も増えてきてはいるが、ガソリン不足や、車がないため受診に行くことができず、不安に思われている方もいた。

3 月 24 日（木）～25 日（金） 保険薬局支援

坂総合病院近くの保険薬局支援に入った。業務に入る前の朝 6 時に起床し、七ヶ浜へ被災状況を自分の目で確かめに行ってきた。



宮城県多賀城市七ヶ浜町沿岸部
一部水没した住宅地
(2011/3/24)

状況は思った以上にひどく、家は土台のみ、水田は海水漬け、大型の船や車が至る所に散乱していた。七ヶ浜の元の状態を知らない私のような人間でもこれだけの衝撃を受けるのだから、その地域に住んでいた方がこの惨状を目にしたら、いったいどのように感じるのだろうか。

送迎してくれたタクシーの運転手にこれからどうされるのか話を聞いてみた。「この地域の人間はこの場所で何代にも渡って生きてきた。津波は怖いが、おそらくみんな戻ってくるよ」と仰っていた。



宮城県多賀城七ヶ浜町沿岸部
土台を残し流されてしまった住宅地
(2011/3/24)

最後の2日間は保険薬局の業務について。1日に何度も大きな余震が発生しているなか、普段の2倍から3倍の患者数のうえ、一部の機械が作動しない、薬自体が足りず、処方日数を分割して調剤せざるを得ない状況など、混乱する要素が多く、薬局職員の方もまさに不眠不休で頑張っておられた。職員の方々もやはり被災されており、いまだ家の電気も水も通っておらず、薬局で寝泊まりしている方や、交通手段がなく、最寄りの別の薬局で業務についている方もおられた。薬局内の勝手が分からず、不慣れではあったが、今回の支援で少しでも職員の方に休んでもらえたのではないかと思います。

調剤業務だけではなく、服薬指導にも1日入れてもらい、薬剤情報提供の傍ら、色々な話も聞かせていただいた。

「家を流され、薬もなくなってしまったのですが、お薬手帳は見つかりました」と言って、海水に濡れてふやけたお薬手帳を出す患者。

「津波にのまれ、重油の混じった海水を飲んでしまって、まだ治療中です」と言う患者。

「娘が心配しているからいったん東京に避難しろと言われて、今から迎えに来てくれるみたいですよ」と言う患者。

震災により、突然、非日常に追いやられてしまった被災地の方々であるが、私の方を見て、白衣に入っている京都民医連の刺繍や、関西なまりの話し方から、京都からの医療支援者であるということは患者側からはすぐに分かってしまうようで、「遠いところからわざわざありがとう。皆さんの笑顔をみるだけで支えになり、元気が出てきます」「私、関西弁大好き！もっと話してちょうだい！」などと話しかける方もあり、支援に対してとても感謝されているようで、支援に行っている身であるにもかかわらず、逆に励まされているような感覚であった。

3月26日(土) 医療支援終了, 現地出発, 京都到着

医療支援が終了し, 宮城県を出た。ガソリン不足が深刻で何 km にもわたるガソリン待ち, 宮城県から避難する方々の車で, 大渋滞が起こっており, 高速道路に入るまでかなりの時間を要した。朝9時に出発し, 京都に到着したのが夜9時だった。行きの荷物に比べ, 帰りはほとんどの荷物を支援物資として置いてきたので, 重量は随分と軽くなっていた。

振り返って思うこと

私自身, 今回が初めての被災地支援であったうえ, 震災後 10 日しか経っておらず, まだ現地の情報がほとんどない状態で支援に行くことになったため, 少し不安はあった。また, 「自分が被災地に行って本当に役に立つのか, 経験の浅い自分のような者が軽々しく支援に行くと言ってしまって良かったのか」と支援に行くことが決まってから, よく自問自答していたように思う。ただ, 現地に行ってからそんな考えはどこかへ行ってしまい, とにかく必死に医療活動を行い, 被災地で過ごした日々は一瞬のことだったように思える。

京都へ帰ってきてから時どき思うことがある。震災支援者はほんの数日, あの悲惨な状況下に居ればよいのだが, 被災された方々は今後, 何年かかるかも知れない完全復興の日まで, 被災者としての生活がずっと続いていくのである。今後, 復興に向かっていくなかで現地の方々のニーズも時々刻々と変化していく。よく言われているように今後は細く長い支援が必要になると予想される。現地に行くことだけが支援ではなく, 被災地の復興を望み, 自分にできることを少しでもしていくことが重要である。

(なかがわ・なおと メディカプラン京都すこやか薬局)